

小学3年3組 国語科学習指導案

指導者 喜多川昭博

1. 単元名 主人公の成長を読み取ろう –「モチモチの木」–

2. 授業の構想

(1) 2学期になり、物語文「ちいちゃんのかげおくり」を学習していたときの一コまである。

「家に帰ったときのちいちゃんの気持ちを考えよう。」

M・J：悲しいと思う。

T：どうしてそう思ったかな？教科書のどこかに書いてあったかな？

M・J：特に書いていないけど、この場面を読んでそう思いました。

A・K：いや、書いてあるよ。「なくのをやつとこらえて」って書いてあるから、「悲しかった」のだと思うよ。

空襲の翌朝、焼け落ちてなくなった自宅にちいちゃんが帰った場面について、上記の課題「家に帰ったときのちいちゃんの気持ちを考えよう。」を設定して学習していた。一人ひとりが様々な気持ちを想像していたが、理由について問うと、波線部A・Kのように記述から読み取っている児童は少数であった。その後も、叙述に沿って登場人物の心情について読み取る学習を進めたが、「読まなくても、もう分かるから書ける。」と言って自分の考えの根拠となるところを本文から探し出す姿はあまり見られなかった。

この学習場面からとらえられる実態として、本学級の児童は、場面の様子や登場人物の気持ちなどを、文章全体を読んだ印象からおおまかにつかんでいく傾向がある。よって、様子や気持ちを表すことばや表現に着目し、それを手がかりとした読みを行っていくことが、本学級の児童にこれからつけていくべき力であると考えられる。

(2) 本単元では物語文「モチモチの木」を扱う。主人公は、自分たちの住む小屋の前に立つ大きな「モチモチの木」が怖く、夜になると家の外に1人で出ようともしない5歳の男の子、豆太。大好きな「じさま」が真夜中に腹痛を起こし、もがき苦しむ姿を見たことで、医者様を呼びにたった一人で2kmもある距離を助けを呼びに走った。その帰り道、「一人の子ども、それも勇気のある子どもだけ」見ることができるとじさまが言っていた、モチモチの木に灯がつくのを見ることができた、というあらすじである。読み手の児童にとっては「豆太はすごいなあ」と強く印象を受ける物語の展開である。このような印象を受ける要因は、「おくびょう」豆太が、たとえとっさのこととはいえ、大切な人のために勇気ある行動をとることのできた心の成長であり、それを読み手が感じ取るからであろう。物語の特徴として、語り口調で時間の経過とともに展開し、「ぶるぶる」などの豆太の心情が分かる表現が随所に見られることから、叙述に沿って人物の心情をとらえやすい。そこで、読み取る対象を変化する豆太の心情、すなわち上述の「成長」を中心にして、本単元で主なねらいとして考える、登場人物の心情や場面の様子を叙述に沿って想像しながら読み取ることに接近していくことができると言える。

本学級の児童は、上述のA・Kのような姿も見えつつあることから、登場人物の心情や場面の様子などを読み取っていく過程で、自分の考えがどのことばから派生しているのか、根拠を明らかにしていくことができつつある段階にあるといえるであろう。よって、場面の様子や登場人物の心情がとらえやすい「モチモチの木」は、この発達段階において上記のねらいを達成していくに当たって効果的な学習材であるといえる。

(3) 単元の導入では、挿絵が教科書より多く使つてある絵本を読み聞かせることによって、お話の世界のイメージをより広げられるようにする。児童は初発の感想を書くが、「豆太について思ったこと」を中心に項目を挙げて書くことで、豆太の行動や心情に注目していけるようにする。第2時ではそのような内容の感想を取り上げ、「見つけたよ！豆太の心～豆太の心はどのようになっていくのかさぐっていこ

う」と単元のめあてを提示する。「豆太の心」について、「○○の心」ということばは「今は『感謝の心』がクラスにいっぱいですね」「『がんばる心』であふれそうな3-3です」など、本学級で日常的に児童の心情を表すときに使うことばである。本単元においても叙述の中から想像できる「豆太の心」、つまり心情を「○○の心」と表すことで、読み取っていく対象が容易にイメージできるであろう。また、「さぐる」ということばには本単元のねらいと照らし合わせ、「叙述に沿って」、つまり本文中から豆太の心情がわかることばを見つけていく、という意味合いを込めている。

第2次では「おくびょうな心」ばかりだった豆太が「勇気の心」を出していく様子を、文中のことばから探っていく。5つある場面ごとに読み進めていくが、場面ごとに一番大きな出来事の「豆太の心」を探ることを繰り返す。例えば、「霜月二十日のばん」の場面では、「こわがる心」「あきらめの心」などが挙がるであろう。「おくびょう」という一言で主に表されている豆太の心情を表すことばが、場面ごとに具体性を増しながら児童がとらえていくであろう。この時には本文中のどのことばから心情を見つけるのか理由も書くことで、叙述に沿うというねらいを達成する手立てとしたい。ふりかえりの場では「豆太の心」の分かり合いを経た自分の考えの変容、或いはより確かになったかを実感できるように、この場面で一番強いと思う「豆太の心」を書き、考えを深める場として有効に機能できるようにしたい。

こうした読み取りを集積した上で、第3次では、場面ごとにまとめたワークシートをふりかえり、豆太の心が結局どのようにになったか考える。読み取りの足あとが自分の手元にあり、それをもとにじさまのために夜道でも1人で走れた豆太の心の「成長」に気づいていけるようにする。単元の終末には手紙で豆太に語りかける活動を設定することで、これまでの読み取りをふりかえる場にしたい。

本時は第2次の第6時間目であり、「豆太は見た」の後半場面である。前時ではこの場面の「豆太の心」を出し合い、児童からは「勇気の心」「がんばりの心」など、豆太の直接的な行動から想起できる考え方と、じさまのことに触れた行動の要因となる考え方の両者が出てくるものと考えられる。出した後は「霜月二十日のばん」の場面で「おらはとってもだめだ。」と言っていた豆太のことを想起し、そんなに弱音を吐いていた豆太なのに、モチモチの木に灯がつくのを見ることができたのは、どのような「豆太の心」があったからか、と問うて本時へつなぐ。本時では、これまでの豆太のじさまへの思いと合わせて、行動の要因となる考え方まで目を向けられるようにしたい。そのために、これまでの読み取りの足あとを掲示しておき、豆太がじさまを大切に思っていることを押さえてきたことをふりかえりやすくしておいたり、「大好きなじさまが死んでしまう方が『もっと』こわかった」といった叙述に目が向いたりするようになっていく。こうして教科書では「勇気」ということばでくくられている「豆太の心」が、じさまを思う気持ちに支えられていたという行動の裏にある背景までつかみ、読み取りをより深いものにしたい。

3. 活動展開計画（全11時間 本時8／11）

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	「モチモチの木」に出会い	1	・「モチモチの木」に出会い、思ったこと・感じたことなどを出し合う。
		2	・初発の感想をもとに難語句を確認した上で、単元を通して「豆太の心」を追うことを探り、単元のめあてを設定する。
2	場面ごとの「豆太の心」を探っていく	3～6	・「おくびょう豆太」、「やい、木い」「霜月二十日のばん」「豆太は見た：じさまが腹痛を起こす」の場面で「豆太の心」を考え、最も強い「豆太の心」を探る。
		7	・「豆太は見た：モチモチの木に灯がついたのを見る」の場面で豆太の心を出し合う。
		⑧	・「豆太は見た：モチモチの木に灯がついたのを見る」の場面で最も強い「豆太の心」を探る。
		9	・「弱虫でも、やさしけりや」の場面で豆太の心を探る。
3	場面ごとの「豆太の心」を手がかりに、豆太の心の成長をとらえる	10	・豆太の心がどうなっていったのかこれまでの学習をふりかえりながら考え、豆太の心が成長したことをとらえる。
		11	・豆太への手紙を書くことで、これまでの学習でつかんできた「豆太の成長」をふりかえる。

4. 本時の学習

(1) ねらい 「豆太は見た：モチモチの木に灯がともる」の場面において、豆太の勇気ある行動の背景には、じさまのことを強く思う気持ちがあったことを、叙述に沿って想像した「豆太の心」やこれまでの読み取りなどからとらえることができる。

(2) 展開

学習場面と子どもの取り組み	教師のはたらきかけと願い
1. 本時のめあてを確認する。 灯のついたモチモチの木を見ることができた豆太には、どんな心が強くあったのか考えよう	・本時の学習内容は前時の最後に確認しあっており、想起する形でめあてを提示し、児童が本時の活動に見通しをもてるようとする。
2. 本時の学習場面を音読する。	・学習範囲を明確にすることと、基礎的な音読の力を育てる意味で、毎時間の音読は大切にしたい。
3. 最も強くあったと思われる「豆太の心」をワークシートに書いて考える。 ○「豆太の心」が書けない子 ○理由が書けない子 ○理由まで考えて書いている子	・前時の学習での「豆太の心」は掲示しておき、どれが一番強いかと問いかけ、ともに考える。 ・どうしてその心になったのかを聞き、理由の文章になるように教師側で整理する。 ・自分の考えをもてていることを認め、理由がみんなに対して伝わるかどうか、という視点で書いたものを見直すよう声をかける。
4. 自分の考えた最も強い「豆太の心」を出し合うことで、豆太の心の中身についての読み取りを深める。 ・「強い心」「負けない心」「じさまのことを大切に思う心」「やさしい心」など ↓ 「じさまのことを大切に思う心」	・「じさまを大切に思う心」など、これまでの豆太のじさまへの思いや「じさまが死んでしまうほうが『もっと』こわかった」という叙述と合わせて、行動の要因となる考え方まで目を向けられるようにしたい。 ・豆太の直接的な行動からの考え方で終始している場合には、「がんばりを出すためには、わけがあるのではないかな。」などと補助発問をして、行動の要因となる考えに気づかせたい。
5. 本時の学習内容についてふりかえる。 (例)「じさまのことを大切に思う心」 (理由)負けない心や強い心を出すことができたのは、じさまに死んでほしくない、と豆太が強く思っていたからだと思います。最初は強い心があったからと思っていたけど、○○君の考えを聞いて今まで豆太がじさまのことを大好きだったことを思い出したので、考えがかわりました。	・もう一度自分の「最も強くあったと思われる豆太の心」を考えてみることで、展開4をふまえて自分の考えが変容したりより確かになったりしたことふりかえる場として機能できるようにしたい。